

シャッター

2008(平成20)年8月25日鑑賞<角川映画試写室>

★★★



監督＝落合正幸／脚本＝ルーク・ドーン／製作＝一瀬隆重、ロイ・リー、ダグ・デイヴィソン／出演＝ジョシュア・ジャクソン／レイチェル・テイラー／奥菜恵／デヴィッド・デンマン／ジョン・ヘンズリー／マヤ・ハイゼン／ジェームズ・カイソン・リー／宮崎美子／山本圭（20世紀フォックス映画配給／2008年アメリカ映画／90分）

……あなたは心霊写真を信じる？ その答えがどうであれ、この映画を観れば価値観が変わるかも……？ 「2人のO」がハリウッドデビューしたが、「メグミ」という名前の浸透度がポイントに。それにしても、急に肩が重いと感じ始めたら、要注意。なぜなら、それは何かを背負っているかも知れないから……。

2人の“O”がハリウッドデビュー！

『リング』（98年）、『呪怨』（99年）等によって、ジャパニーズホラーの名をハリウッドに知らしめたのが一瀬隆重監督だが、今回彼はプロデュースに回り、落合正幸監督がハリウッドデビュー！ 年齢的には一瀬が1961年生まれ、落合が1958年生まれたから一瀬の方が若いですが、さて一瀬の後ろ楯の中、落合はハリウッドでどんなジャパニーズホラーを……？

ハリウッドデビューした“O”の1人が落合正幸なら、もう1人の“O”が、女優の奥菜恵。「恵」という芸名がそのまま「メグミ」として役名にされたのは、彼女にとっては超ラッキー。なぜなら、「めぐみ」という名前は北朝鮮による拉致事件被害者の「横田めぐみ」さんで有名だから、ブッシュ大統領もその名前を知っているはず……？ また、めぐみは、『ピアノ・レッスン』のジェーン・カンピオンが製作総指揮を務め、クリス・シュルダンとパティ・キムが監督した映画『めぐみー引き裂かれた家族の30年』（06年）というタイトルにもなっているから、多くのアメリカ人に覚えられやすい女性の名前。

セリフは全くなく、また出番もハリウッドデビューというには少ないが、印象度という点ではかなりOK。さて、今後『シャッター』に続くハリウッドでの、奥菜恵の第2第3の出番は……？

テーマは心霊写真

日本でいう心霊写真のことを、英語では“スピリチュアル・フォト”というらしい。合理主義が徹底している西欧人の感覚では、因習にとらわれやすい日本人ほど心霊写真の恐ろしさはわからないのではないかと思うのだが、この映画を観ていると“スピリチュアル・フォト”の恐ろしさは日米共通……？

ニューヨークで結婚式を挙げたベン（ジョシュア・ジャクソン）とジェーン（レイチェル・テイラー）の新婚カップルは、今仕事と新婚旅行を兼ねて東京を訪れていたから、その幸せ度は絶好調。ところが、瀟洒なコテージに向かう夜の山道で、ジェーンが運転する車が白い薄衣をまとった日本人女性を轢いたから大変。もっとも、車は道から落下したものの2人のケガが大したことがなかったのはラッキー。

しかし、ジェーンが明らかに轢き殺した女性の死体は一体どこに……？ 不思議なことに、事故現場には女性の死体はおろか血痕すら消えてしまっていた。これが心霊写真をテーマとした映画でなければ、「ああ良かった。あれは幻想、錯覚だったのか」で終わるのだが、この映画では実はそれが始まり……。以後、ジェーンはあの女性の冷たい顔が忘れられなくなったのは当然。そしてベンは、事故の後遺症は存在しないのに肩の痛みや重みを訴えたり、体型は変わらないのに体重が異様に増加したりと変なことばかり。しかも、新婚ホヤホヤの2人が仲良く撮影した写真やベンが仕事のためにモデルをターゲットに撮った写真には白いモヤモヤが……。こりゃ一体ナニ……？ ひょっとしてこれはあの女の心霊写真……？

さあ、ジェーンが車で轢いたという女性は本当に存在するのだろうか？

メグミに対して一体何を……？

愛し合って結婚した夫婦の間では、隠し事は一切しないようにしよう。ジェーンはそう言い、ベンも率直にそれに同意していたが、人間という動物はそれほど単純なものではないはずだ。

ベンが日本語をしゃべれるのは、かつてカメラマンとして日本で仕事をしていたた

め。その時の仲間が現在エージェント会社を経営しているブルーノ（デヴィッド・デンマン）や、モデル斡旋業者のアダム（ジョン・ヘンズリー）たち。また、ブルーノの世話で手配された美しいアシスタントがセイコ（マヤ・ヘイゼン）。

今回ベンが撮影するのは広告用のファッションフォトだが、その撮影風景を見ると、遊び人集団の雰囲気はプンプンにおってくる。あれだけ華やかな女性モデルたちの中で仕事をしていけばそれは当然だろう。また、モデル斡旋業のアダムの話を聞いていると、モデルという名前での女の子の調達はいくらでも可能という感じ……？

ストーリーは、中盤から自分の撮った写真の中に次々と登場してくる白いもやのようなものに不気味さを感じたジェーンが、スピリチュアル・フォト専門の出版社の編集者ミツオ（ジェームズ・カイソン・リー）にスピリチュアル・フォトについて尋ね、調査を始めるところから、新しい展開を見せていく。そして、霊媒師のムラセ（山本圭）の登場、さらにメグミの母親アキコ（宮崎美子）の登場を経て、ベンはメグミを知っており、ベンがメグミを撮影した写真までであることが明らかになっていく。つまり、ベンはそんな秘密をジェーンに対してひと言もしゃべらなかつたわけだ。それにしても、ベンを含むアメリカの男たちは、メグミに対して一体何をしたの……？

『ハンコック』と同じように90分に！ 落合流のオチのつけ方は？

ウィル・スミスがちょっと奇妙な嫌われ者のヒーローに扮した『ハンコック』（08年）は、当然ながらハリウッド大作（？）だが、上映時間は92分。最近では、テレビドラマの延長のような邦画でもタツプリ2時間の映画が多いが、『シャッター』が『ハンコック』と同じように「ポストプロダクション」で上映時間をきっちり90分におさめたのは立派。

そのため導入部のベンとジェーンとの結婚式のシーンや初夜のシーン（？）は極力ポイントだけとし、またベンが仕事で動いている間ジェーンが1人で東京見物をしているシーンも実にコンパクトに表現している。

さらに感心したのは、ラストのオチのつけ方のシンプルさ。落語では、最後のオチのつけ方が最大のポイントだが、落合監督の『シャッター』では、最後の最後になってメグミがどこにいたのかが明らかに……。それをここで書けないのは当然だから、是非そんな落合流のオチのつけ方はあなた自身の目で……。

2008(平成20)年8月26日記